

資 料

あらためて看護基礎教育における 基礎看護学を考える

ーきたるべき社会のニーズにおける基礎教育とはなにかー
日本看護学教育学会第 26 回学術集会交流セッションを終えて

The prospects for the basic nursing in nursing education

To seek for the educational methods of the social needs
26th Annual meeting of Japan Academy of Nursing Education had held in August 2016

伊東美穂 泉澤真紀 岡田郁子 美濃陽介 佐藤慶如

Miho ITO, Maki IZUMISAWA, Ikuko OKADA, Yosuke MINO, Yasuyuki SATO
保健福祉学部保健看護学科

キーワード：看護基礎教育，基礎看護学，看護学生

はじめに

去る平成 28 年 8 月 22 日（月）～8 月 23 日（火）の 2 日間に渡り、新宿京王プラザホテルにて日本看護学教育学会第 26 回学術集会が開催された。

本学科基礎看護学領域の教員 5 名はこの学会への参加・交流セッションを企画し、看護教育に携わる教員とセッションを通じて交流を図った。定員 70 名という交流セッションの会場ではあったが、立ち見が出るほど多くの方の参加があり、看護基礎教育、特に基礎看護学についての興味・関心の高さがうかがわれた。本資料では、交流セッションにおける交流集会までの経緯と各教員の発表、そしてディスカッションの内容について報告する。

1. 交流集会発表までの経緯

サブテーマにもある「きたるべき社会のニーズ」としては、2025 年超高齢社会に向けた地域医療構想の一つである「在宅医療・介護の推進」といった日本看護協会が 2015 年にまとめた「2025 年に向けた看護の挑戦—看護の将来ビジョン」が発端にある。施設内医療では看護技術の提供が中心となるが、在宅医療では管理や調整、判断力、親身になった手当や相談を受け

るなど、多角的な思考と行動が求められると言われており¹⁾、社会が求める看護師像も変化してくることが予測される。看護師に求められるものが増えていく中、「学ぶ意欲・学ぶ力、こういうものがおちているのではないか」「人間関係構築が不得意」「コミュニケーション能力が低下している」など、現代の若者には様々な課題が挙げられている²⁾。看護の基礎を教える立場として、本大学の基礎看護学教育のあり方をもう一度見つめなおし、教員間で共通認識したいとの思いがあり、他の看護教員たちはどう考えているのか、意見も聞いてみようということで今回交流集会を企画した。

本学会参加にあたり、基礎看護学領域の中で幾度となく勉強会を重ねてきた。元来の大学教育だけではすまない、基礎学力・社会性などのスキル強化を含めた基礎看護学教育の現状を踏まえ、看護の世界に足を踏み入れた学生への基礎的な教育と、社会に求められる看護師像は何かという視点で話し合いを進めた。本大学基礎看護学領域における各教科の到達目標を話し合い、その目標に到達するための関わり合い方や看護師らしさとは何か、看護教育とは何かということをも 5 人で討論してきた。

交流集会の話題提供に際し、発表内容を『テーマ全

体の概要』、『現在の社会・教育面からの捉えと関わり』、『基礎看護学演習と学生の「自律性」「社会性」の育成』という3つの柱に分け、それぞれ担当者が発表していった。その後に交流セッションに参加していただいた方々と意見交換を行なった。

以下、発表担当者による発表内容を記す。

2. 基礎看護学教育における模索

1) 「あらためて看護基礎教育における基礎看護学を考える」

基礎看護学は、看護基礎教育の基盤として重要な役割を果たす。本大学でも1年次から2年次にかけてほとんどの授業が開講されている。そこで、看護をこれから学ぼうとする学生たちに、どのように初年次教育を滑り出し、各看護学につないでいくかということで、その役割は非常に重要であると考えている。

本交流セッションでは、筆者の持ち分の中で、「北海道旭川市と旭川大学」、「現代の若者の特徴」「基礎看護学を担うものとして」「基礎看護学が目指すもの」4点についてプレゼンテーションしたが、後者2点についてまとめたいと考える。

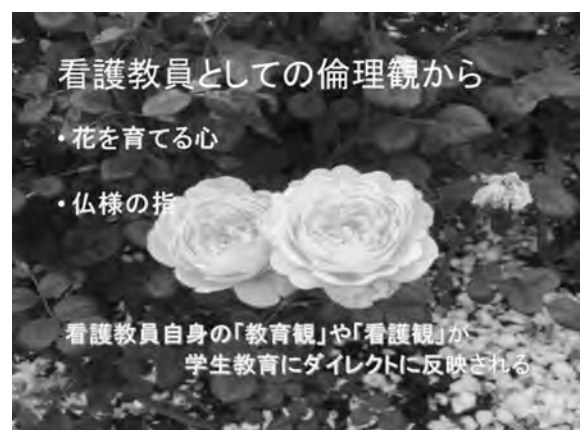
大学に入学してくる最近の看護学生たちの志望の動機には、「親の薦め」や「なりたいたものがないから」という者が多くなったと感じている。入学生の様相が多様化しており、看護の世界の入り口としての基礎看護学として、何をどう教えたらいのかということテーマにした。

第4次カリキュラム改正のただなか、基礎看護学は「専門分野Ⅰ」に位置づけられている。他領域が「専門分野Ⅱ」であるように、他領域と並ぶ独立した専門分野である重要性がうかがわれる。そこで看

護の基盤とは何かの問いかけに、筆者は、看護の見方、姿勢、態度、考え方、その基盤を育てるのが基礎看護学の重要な役割であると考えた。看護の見方とは、人への関心を示す事や看護の視点。看護の態度とは、技術や技能としてまた探求や研鑽すること。さらに看護の姿勢とは、職業人としての倫理。最後に看護の考え方とは、思考力や判断力である。これらはすべて看護の基礎として大切な基盤となるものなので、まず看護学の導入である基礎看護学で、講義や演習、さらには実習の中で、十分に眼をかけながら育ててその素地を作ることが重要だと考えている。

「あいさつ」一つを考えてみる。ただ「おはようございます」と言葉を発しても意味がない。その時どのような心持でいるのか、目線や仕草、声のトーン、表情、そして相手への敬意と対話の中で醸し出される、人としての相互作用としての人間関係。人としての生き方、職業人としての在り方そのものが、看護につながっていくと考えている。そのような看護の素地をもとに、今後発展的な看護へとつながっていくはずである。すなわちそのことを教えることが、基礎看護学だと考えている。

看護を教えることは、「花を育てる心」と「仏様の指」である。水をやりすぎてもいけないし、水を欠いても育たない。適度に声をかけ関心を示し、見過ごさない。そして厳しくとも愛情があることが必要である。また、教員が教えたからわかったのではなく、学生自らできたと思わせられるような関わりが重要である。決して先生のおかげなのではない。「鉄は熱いうちに打て」。入学時の1年間をうまく滑り出せれば、大学4年間の看護教育がうまくいくといっても過言ではない。その重要部分を育てているのが基礎看護学であると考えている。(泉澤記)



2) 学生を成長・発達させる『現在の社会・教育面からの捉えと関わり』

上記サブテーマのもと、臨地側が看護技術以外に学生時に身につけておいてほしい基本的な事とその乖離³⁾、看護に限らず教育界の現状として「学ぶ意欲・学ぶ力が落ちている」、「子どもの娯楽の肥大化」楽しいことが別にあり学びに集中しない、「学習の形骸化が進行している」あまり考えず反復的な学習でその場限りの勉強法が広まり意味深い理解に至っていない、試験通過のための学習であること等を報告した⁴⁾。また、少子超高齢社会に期待される看護の人材育成として、いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護探求への看護基礎教育に求められる方向性は、大学化による基礎教育の充実、高い実践応用と問題解決思考を持つ看護師を育成すること、専門知識や技術とともに優れた観察力や判断力がこれまで以上に要求され、自己啓発でき自律できる人材育成が必要であることを説明した⁵⁾。看護基礎教育の初学者に関わる中でそれらを実感し、昨今の教育の難しさを感じているが、基礎看護学として「看護の学び方の基礎作り」言葉使いから始まり学びへの真摯な態度と学習方法、「知識と技術を身に付けていく支援」「求められる人材への基礎作り」現代の脳や学生の現状を捉えわかりやすく丁寧に教えるため試行錯誤し工夫している点、毎日の技術練習に向き合い、その中で細かな技術指導のみではなく、コミュニケーション能力の向上、協働性として、お互いの助け合い情報交換を促す、一つできたらそれを伝え自信を持ってもらい、次の課題を認識・達成できるよう各自に繰り返し支援し、自信を少しずつ持つよう関わっていること、振り返りレポートから各自の成長を捉え、リフレクションへの根底を創っている現状等を報告した。

この交流集会後も基礎看護学の教員として、学生の成長が停滞するのは教育方法のあり方であるとの思いを持ち、真剣に向き合い、力を入れすぎず、丁寧に指導することを心掛けている。学生は可能性を秘め、各自の個性がある。それを伸ばし、各自が責任をもって行動でき、感性を磨き、自分の看護を常に考え、何か困難があってもどうすべきか自ら考え行動していけるよう、自律する姿勢の育成も心がけている。学生の成長が滞り、手をかける必要が生じる状況を作ると一見教員がよく機能しているように見えるが、それは学生に対して大変失礼である。各自

の個性と可能性をいかに重視し、教員間においてもお互いを認め協力し合い、学生の少しの変化など情報を共有し、如何に一貫した態度で学習を支援していくか、それを基礎看護学教員の皆で考え実践する日々であり、私自信大変勉強になっている。それでも学生が向く方向を時々修正しなければ、やはり楽しい方向に意識が行き本来の学びがおろそかになることもある。どうして今それが必要であるか、学生自身がどうなっていきたいか考えられるような日々の関わりが基礎では重要である。また、技術試験は関門ではなく、学生がこれから接していく患者に、技術を体得した上で少しでも自信をもって実践できるための基礎作りである。筆記や技術試験通過が目的ではなく、ケアの探求へベクトルを定めさせていく。そうすると学生は考え、教えた以上のことを追及している。彼らの可能性と伸び代は大きいと日々感じており、臨地実習指導者も同様の意見であった。今後も自分自身が自律し真摯に向き合っていくよう、また学生に求めるだけでなく、日々の挨拶に始まり技術の基本原則実践においてまず自分が行動し学生の学びとなるよう、愉しみながら努力を重ねていきたい。(岡田記)

3) 基礎看護学演習と学生の「自律性」「社会性」の育成

近年、高等教育が大衆化し、それに伴い学生の多様化が指摘されている。学生の基礎学力やモチベーション、学習目的、学習意欲、学習習慣も多様化しており、身の回りの生活環境が便利になってきたこともあって生活体験の乏しい学生が多くなり、学習支援や学生支援の必要性とともにキャリア教育、初年時教育の必要性が言われるようになってきた⁶⁾。また、信夫⁷⁾は、大卒学生を採用する企業側より、自分の意志で計画、実行、統制できる能力(自律性)、社会の中でよりよい人間関係を築くことができる能力(社会性)の低さが議論されるようになっており、大学教育の中で学生の自立性や社会性を育成していく教育方法の必要性について指摘している。こういった学生の変化は、一般大学生に限らず現代の若者に共通して見られるものであり、看護系大学生も同じような状況にあると言え、こうした特徴を理解した上で、対象にあった教育方法が求められている。そこで、基礎看護学の看護演習の場面を通して、学生の「自律性」と「社会性」の育成強化のために工夫した本学の事例について紹介する。

平成 28 年度に入り、本学の基礎看護学領域において、看護の初学者である 1・2 年生が後に続く各領域へと連結していく中で、「大学生としての自覚を持ち責任がある行動がとれる」「看護に関する基本的な態度や姿勢を持つことができる」「スケジュール管理ができ、主体的に学ぶ姿勢を培う」「看護を知り、看護者になりたいという意識が芽生える」という 4 つの学生到達目標を定め、この到達目標に沿い各科目担当教員で講義・演習を設定した。

筆者が担当する科目単元として、診療に伴う援助技術の「感染防止技術と創傷管理」「与薬の技術」がある。看護技術演習を担当することが多いため、演習を通して、学生自身が計画性を持ち、主体的に取り組む、学生間でコミュニケーションを取りながら演習を進めていく、学生の自律性・社会性を補完できる指導方法について工夫した。これまでの演習では、看護技術の手順を図で入れ、注意・留意事項の注釈を入れた演習要領を教員が作成し、看護技術チェックリストをもとに、教員指導のもと演習を実施していた(図 a)。しかし、この方法だと学生の主体的に学ぶ姿勢が引き出せず、提示された演習要領とチェックリストに従い、疑問も持たずに演習を進めてしまうことが考えられた。そのため、事前に演習内容を提示し、学生各自で演習要領及び看護技術チェックリストを作成し、演習を実施することとした。また、各自で作成した演習要領及びチェックリストを用い、図 b のように、学生間で演習要領に基づき看護技術の指導・助言を行う学生、チェックリストに基づき指摘・助言を行う学生、技術演習を行う学生と、各学生が役割を持って演習を行うように工夫した。学生自身で演習要領等を作成し、学生間指導にあたるため、事前学習効果、主体的に学ぶ姿

勢を引き出せ、また、学生間で指摘・指導・助言を行うことで、学生間のコミュニケーションが図られ、学習の相互作用を期待することができた。今回紹介した事例の今後の課題としては、学生への教育効果を体感的にはなく、客観的な指標を持って評価できるようにし、本学の学生の特徴を踏まえた上で、学生の「自律性」と「社会性」の育成ができる教育方法について模索していく。(美濃記)

3. 交流セッションにおけるディスカッションの内容

参加者は予想以上に多く、看護教員の関心の高さがうかがえた。発表の際、頷きながら聞いている方も多くみられた。その中でいくつかの質問があったので紹介する。

まず、基礎看護学演習時の他領域教員との協力体制についてである。基礎看護学の演習において他領域の協力が得られにくい中、関心があったのだと考える。本領域では、今年度演習指導教員増員の必要性を明確にし、協力を得ることができた。今後も各領域に働きかけていくことで、各領域間の連携を図っていくことなどを挙げた。次に 80 名近くもいる学生に対し、どのように一人ひとりの軌跡を大事に一貫した関わりをもつようにしているのかという質問である。少ない教員で多くの学生に関わらなくてはいけない現状が、他大学の現状でもあることを垣間見た。領域に限らず、学科全体で情報共有をしながら考えていく必要性を述べた。他にも数件質問があったが、ここでは割愛する。

今回、このように他校の教員と意見交換する中で、どの大学・専門学校でも基礎看護学として初学者である学生 1 人ひとりと向き合い関わることの難しさを感じているのだということが伝わってきた。質疑応答を行っている時間は瞬間に過ぎ時間切れとなり、他大学・専門学校の具体的な現状や教育方法について話を聞くというところまでには至らなかった。



図 a 教員作成の演習要領・看護技術チェックリスト



図 b 看護技術演習の学生役割

4. おわりに

今回看護教育学会交流セッションに参加したことは大変有意義であった。半年間基礎看護学領域の教員間で何度も意見交換し情報を共有していくことで、基礎看護学領域における学生の教育に対する考えを統一し、一貫した態度で学生と向き合う姿勢ができてきた。また、交流セッションの中でも演習の進め方といった本学基礎看護学領域の教育内容について疑問・意見をいただくことで、他者の視点からみた教育方法の疑問点がわかり、改めて現在の教育方法をみつめ直す良い機会となった。

筆者は、看護教育に携わる者としてまだ日が浅い。学生とどのように関わっていけばよいのか試行錯誤する中、今回この学術集会に参加するにあたり、基礎看護学領域の教員間で勉強会を重ねることで、若者の特徴や本学学生の教育について学ぶ機会となった。看護の基礎知識を教えるだけでなく、学生を観察しながら関わり、共に「考える」という諸先生方の姿を間近で実際に見て学び、微力ながら筆者自身もそうして学生と関わりを持つよう努めていきたいと考えた。その結果、学生の講義や学内演習への向き合い方に変化が生じてきていることを目の当たりにし、考える力が身につけていることを実感した。じっくりと時間をかけ学生一人ひとりの特性を知り、教員間がお互いに情報を共有し合い、その特性にあった学習方法を共に考え実践していくことが大切なのではないかと考えた。学習に対する向き合い方や生活面に対する指導も必要であり、未だに現代の若者の特徴をもった学生に対し教育の難しさ・奥深さを痛感する日々ではあるが、本学学

生が看護の魅力に気づき、目指す看護師像をもち、そこに向かって歩んでいけるような教育を目指していきたい。

学生の特徴は今後も変化していくことが予測される。教育として普遍的な部分と、その時々の本学学生の特徴をふまえ変化させていく部分を見極め、教育内容を見直していくことが課題となる。今後も教員間で綿密に情報交換を行い、基礎看護学領域の教員が一丸となって看護基礎教育と向き合っていきたい。また、他領域の教員とも協力体制をとり、本学科全体で看護師となる人材を育てていけるよう、教育のあり方を問い続けていきたい。

引用文献

- 1) 濱名篤：学生が自ら学ぶようにするために高等教育における学習支援の必要性，看護教育 (50) 7, 568-573, 2009.
- 2) 信夫千桂子：大学生の自律性と社会性の育成—ゼミナールとクラブ・サークルを事例として—，桃山学院大学経済経営論集 (55) 4, 335-375, 2014.

参考文献

- 1) 特集・看護が変わる 世論時報 4月号，世論時報社，2010.
- 2) 市川伸一：学ぶ意欲とスキルを育てる～いま求められる学力向上策，小学館，2008.
- 3) 箕浦とき子・高橋恵：看護職としての社会人基礎力の育て方，日本看護協会出版会，2016.
- 4) 市川伸一：教えて考えさせる授業を創る，図書文化，2013.
- 5) 平成 27 年度版看護白書，日本看護協会出版会，2015.